

# 100周年 ロシア革命 考える映画祭

今年で100周年になるロシア革命の意義や思想について、映画を通して考える映画祭「映像に刻まれたロシア革命」が23～26日、京都市中京区の京都文化博物館で開かれる。主に1920～30年代のソビエト映画を見ることで、単なる「プロパガンダ」として切り捨てられない表現の多様性や思想性に目を向け、革命とは何かを逆照射する試みだ。

## 中京で23～26日

京都大人文学研究所(人文研)の主催。企画を担当する伊藤順二准教授(コーカサス近代史)は「ロシア革命に対しては、強い憧れの一方、『悪』とする風潮や研究も盛んだった。ところが今やどちらもなく無関心。20世紀最大の出来事なのに、忘れ去られようとしている」と再考の必要性を訴える。「イメージによって革命を称揚するプロパガンダの手法は、現代のテレビや映画まで技法



関西のロシア映画上映運動で作成された冊子(京大人文学研究所蔵)



「十月」

### 上映スケジュール

23日—午後1時半	「母」(1926年)
午後5時	「干渉戦争」(68年)
24日—午後6時半	「26人のコミッサール」(33年)
25日—午後1時半	「十月」(27年)
午後5時	「十月のレーニン」(37年)
26日—午後1時半	「ロマノフ王朝の崩壊」(27年)
午後5時	「チャパーエフ」(34年)

一般500円、大学生400円、高校生以下無料(各回入れ替え制)。

として生き続けている」  
例えば、エイゼンシュテイン監督のモンタージュは「映画による弁証法」。虐殺される民衆の映像に、牛の解体シーンをつなぐことで「家畜のように扱われた」ことを表すように、二つのショットを連続させて第三の意味を観客の中に生み出す。革命10周年を記念した同監督の「十月」では、アフリカなど異国の神々が次々と登場し、最後にギリシャ正教の十字架が落ちていき、「無神論のプロパガンダ」(伊藤准教授)になっ



「十月のレーニン」

## プロパガンダの背後に思想性

一方、革命20周年記念として制作されたミハイル・ロム監督の「十月のレーニン」になると、実験的な手法は後退し、十月革命を主導したレーニンに焦点を当てた「革命物語」になる。企画に携わる中村唯史(京都大文学部教授)は「ロシア文学・ソ連文化論」は「17年から20年代中ごろまでは、実はものすごく自由があり、芸術的、文学的な実験ができたロシアアヴァンギャルドの時代。ところが20年代後半以降は、スターリンによって統制色が強まり、逆に分かりやすいドラマが復活していく」と読み解く。

革命に続く内戦期に活躍した司令官を描いた「チャパーエフ」は、日本で言えば「西郷隆盛のような、誰もが知っている英雄」で、中村教授は「とても良くできたドラマ。B級映画的に楽しめる。プロパガンダ映画といっても、当時の民衆もエンターテインメントとして楽しんでいたことは間違いない」と語る。

ほかにも、記録フィルムをつなぎ合わせて二月革命に迫った「ロマノフ王朝の崩壊」や、内戦期をコメディタッチで描いた60年代の「干渉戦争」など、日本で商業公開されていない作品も上映する。上映の前後には専門家のレクチャーもある。

23日に「ロシア・ソ連映画の日本受容」と題して講演する人文研の小川和子助教(映画史)は、関西の労働者サークルが1950年代に盛んにロシア映画上映運動をしていた資料に基づき、当時のロシア革命の見方を分析する。小川さんは「かつてのプロパガンダは集団で見ることによって成立していた。一定の時間を拘束され、大きな一つの画面をみんなで見るという『映画の体験』を見直す機会にしたい」と呼び掛けている。

(阿部秀俊)